中京学院大学看護学部
紀要　第９巻第１号
2019 年３月発行

〈研究報告〉

看護大学生が捉える高齢者の QOL を支える看護
－ 老年看護学実習Ⅰレポートからの分析 －

Nursing Supporting the QOL of the Elderly which Nursing College Student Grasp
－ Analysis from Their Geriatric Nursing Practice Ⅰ Reports －

山口奈都世・平工淳子・穴井美恵[1)]
Natsuyo Yamaguchi, Junko Hiraku and Mie Anai[1)]

要　旨

本研究の目的は，看護大学生が高齢者の QOL を支える看護を生きがいの視点からどのように捉えているかを明らかにし，高齢者の QOL の維持・向上を考えた看護実践能力を養うための教育方法の示唆を得ることである．A 看護大学３年生 41 名の老年看護学実習Ⅰ終了後の課題レポートから，高齢者の QOL に関連する文章を抽出し，類似性に基づき分類した．学生は高齢者の QOL を高める要因を，身体，精神，社会の３側面から捉えていた．しかし，精神，社会的側面を捉えた記述は少数であり，高齢者を全人的に捉えることが弱い傾向にあった．また QOL を支える看護とは，生活を支える，尊厳を守る，専門的な知識と技術に基づいた看護であると捉えていたが，QOL を高める要因とそれを支える看護のつながりが薄い傾向にあった．これらの結果から，高齢者を全人的に捉えること，QOL を支えるためにどのような看護が必要なのかを具体的にイメージし統合させるための教育方法の検討が示唆された．

キーワード：高齢者，QOL，看護大学生，老年看護学実習，レポート分析

Ⅰ．緒言

内閣府による平成 29 年版高齢社会白書では，65 歳以上の高齢者人口は 3,459 万人，高齢化率は 27.3% であり，その後も高齢者人口は上昇を続けると推測されている（内閣府，2017）．そして日本は，医学の発展と医療技術の進歩や医療制度の充実などにより，2016 年の世界保健機関（WHO）が発表した国別の平均寿命の男女平均で世界１位となっている（公益社団法人日本 WHO 協会，2016）．しかし平均寿命の延長により，高齢者の尊厳や終末ケア，緩和ケア，さらに生活の質（quality of life：QOL）の重要性が求められ，老年看護における重大な課題となっている．

このような時代の中で，看護大学生（以下，学生）は老年看護学実習だけでなく，基礎看護学実習や成人看護学実習においても，高齢者を受け持つ機会が多くなることが予測される．また，臨床の場においても高齢者の看護に携わる機会が多くなることは必然であり，看護教育において高齢者を理解し，QOL の維持・向上を考えた看護実践ができる人材育成が求められる．

[1)] 名古屋学芸大学看護学部

QOLとは様々な要素から構成されている抽象的な概念であり，一般的には，個人の総合的な幸福感であると定義されている（古谷野，2004）．そして高齢者のQOLを考慮した看護とは，その人が持っている能力の可能性に向かって自立を考えることであり，ケアを受けた高齢者自身が，自分なりの生活機能において自立ができていると満足できること（櫻井，2011）と述べられている．このことからも，看護学生が老年看護学実習を通じ，高齢者の理解を深め，個々のQOLを考えた看護援助が行えるよう導くことは重要であると考える．そして，実習終了後の課題レポートで，高齢者のQOLを支える看護について考える機会を設けることは，高齢者における看護観を養う上でも意義のあることと考える．

老年看護学実習における施設実習終了後のレポート分析の研究では，「老年者の立場に立ったケアとは」や「振り返りレポート」「実習からの学び」を課題テーマとしている（杉野・丹羽，2011；隈部・田中・梶原，2012；千葉・原田・細田他，2008；森田・永田，2006）．「老年者の立場に立ったケアとは」のレポート分析では，その人らしさを理解する，老年者を尊重する，自立を目指した関わり，環境の充実など，高齢者のQOLにも関係するカテゴリが抽出されていた（杉野・丹羽，2011）．「実習からの学び」の分析では，自己の高齢者観や看護観に関する学びが多く，意欲や生きがいとQOLとの関連を結び付けられる指導の必要性を示唆している（森田・永田，2006）．また老年看護学実習におけるレクリエーション体験は，看護学生が高齢者のQOLについて学ぶ貴重な学習である（山本・小林他・三井，2012）など，レクリエーションとQOLの関連についての研究も多くみられた（釜屋・佐藤，2016；今井・渡辺・棚橋，2012；中岡・上西，2005）．しかし，学生が捉える高齢者のQOLを支える看護について具体的に分析されている研究は見当たらない．

そこで今回，老年看護学実習Ⅰで高齢者施設実習を終えた学生の課題レポートの記述内容を分析し，学生が高齢者のQOLを支える看護を生きがいの視点からどのように捉えているのかを明らかにすることを目的とし，高齢者の生活に関心を持ち，看護が提供できる実践能力を養うための教育方法の示唆を得るために研究に取り組むこととした．実習体験から得られた学生のQOLを支える看護に対する認識が文章化された記述には，看護実践能力を構成する様々な要素が含まれていると推察される．学生が体験から得た看護に対する認識を自身の言葉で文章化し意識化することは，実習での学びを体験から経験に深めさせることができるため，学生が記載した内容を客観的に評価する意義は大きいと考える．

Ⅱ．研究目的

老年看護学実習Ⅰで高齢者施設実習を終えた看護大学生の課題レポートの記述内容を分析し，学生が高齢者のQOLを支える看護を生きがいの視点からどのように捉えているのかを明らかにすることで，高齢者の生活に関心を持ち，QOLの維持・向上を考えた看護実践能力を養うための教育方法の示唆を得る．

Ⅲ．用語の定義

本研究におけるQOLとは，生きがいの視点で捉えた生活の質を示す．

Ⅳ．老年看護学学習背景

1．老年看護学講義および演習概要

（1）老年看護学概論

1年生後期に老年看護学概論1単位15時間を終了しており，加齢に伴う身体的変化や，高齢者の自立を支える社会制度のしくみ，虐待問題や倫理的課題などを含む高齢者看護の必要性について学び，「自分が抱く高齢者のイメージを意識し，そのイメージが普段の自分にどのような態度や行動に現れているか，その影響についてレポートする」ことを事後課題とし，高齢者に対する倫理や老年観を考える機会としている．

（2）老年看護援助論

2年生前期には，老年看護援助論Ⅰ2単位30時間（講義科目），後期には，老年看護援助論Ⅱ1単位30時間（演習科目）を終了しており，高齢者に多い症状や疾患，複数の疾患を持つ高齢者への看護，認知症高齢者への関わりなど疾患の理解及び援助についての講義，演習を通じ，高齢者の自立や自尊心を高める看護の必要性について学んでいる．

2．老年看護学実習概要

（1）老年看護学実習Ⅰ

A看護大学はカリキュラム変更により平成29年度より老年看護学実習の単位をこれまでの3単位135時間から4単位180時間に変更し，その中で施設における高齢者との関わりを通して，老年期にある対象の特徴を理解し，高齢者のもてる力に着眼した看護を実践する基礎的能力を養うことを目的とした高齢者施設実習2単位90時間を3年生前期に計画している．実習では高齢者とのコミュニケーションや清潔，食事，排泄など生活援助の実践を中心とし，生活史の聴取やレクリエーションの企画を取り入れ，高齢者との関りを通じて高齢者理解を深め，QOLの維持・向上を考えることができるような内容にしている．また実習終了後に，老年看護学実習Ⅱにつなげられるよう「高齢者のQOLを支える看護」について生きがいの視点から捉えた課題レポートを提出することとしている．

（2）老年看護学実習Ⅱ

3年生後期に，さまざまな健康レベルにある高齢者とその家族の身体的・心理的・社会的な状況を理解し，対象のQOL向上を目指した看護が実践できる基礎的能力を養うことを目的とした病院実習2単位90時間を実施し，受け持ち患者の看護過程の展開を行う．

Ⅴ．研究方法

1．研究対象

A看護大学3年生73名のうち，老年看護学実習Ⅰを終了し研究同意が得られた58名の学生の課題レポートを研究対象とする．

2．　研究期間

平成29年10月～平成30年3月

3．データ収集方法および分析方法

老年看護学実習Ⅰ終了後に，「高齢者のQOLを支える看護」についての課題レポートを担当教員に提出した．当該科目の評価終了後に，研究の趣旨を説明し，研究協力に同意が得られた学生の課題レポートを分析対象とした．分析方法は，ベレルソンの内容分析手法を用いて質的に分析した．課題レポートから，高齢者のQOLを支える看護について具体的に述べられている文章を抽出し，類似性に沿ってグループ化しサブカテゴリとした．さらに，サブカテゴリの類似性に沿ってグループ化しカテゴリとして名称をつけた．文章の抽出とカテゴリ化は研究者3名で行い，信頼性を確保した．

4．倫理的配慮

研究対象者となる3年生の学生に対し，研究の趣旨，方法，研究への協力は自由意思であること，協力の同意はいつでも撤回できること，拒否による不利益は一切被らないことを，口頭および文書にて説明した．また，得られたデータは個人が特定されないようにコード化し，本研究以外では使用しないこと，結果は学会等で発表すること，レポートの内容についても漏えいしないことの説明を口頭および文書で行った．研究協力への説明は当該科目の評価終了後に行い，成績に影響がないことを保障した．本研究は，所属機関の研究倫理審査会の承認を得て実施した．

Ⅵ．結果

本研究の対象は，老年看護学実習Ⅰを終えた学生73名のうち研究同意が得られた58名（回収率79.5%）の実習終了後の課題レポートで，レポートのテーマである「高齢者のQOLを支える看護」について明確に記されていた41名のレポートである．

高齢者のQOLを支える看護について，生きがいの視点から述べられている文章を抽出した結果，120の記述内容が抽出された．この記述内容を，実習を通して学生が捉えた高齢者のQOLとそれを支えるためにどのような看護が必要と考えるかの視点で分類し，それぞれを【看護大学生が捉える高齢者のQOLを高める要因】，【高齢者のQOLを支える看護】とした．

【看護大学生が捉える高齢者のQOLを高める要因】の記述内容は53であり，9サブカテゴリ，3カテゴリが抽出された．【高齢者のQOLを支える看護】の記述内容は67であり，12サブカテゴリ，3カテゴリが抽出された．以下にカテゴリを［　］，サブカテゴリを『　』，記述内容を「　」としてその内容を説明する．

1．看護大学生が捉える高齢者のQOLを高める要因

学生が捉える高齢者のQOLを高める要因は，表1に示すように，［身体的側面］，［精神的側面］，［社会的側面］の3つのカテゴリで構成された．［身体的側面］は，32記述数と多くを占めた．サブカテゴリにおいては，『食事を摂る』が14記述数と一番多く，次いで，『もてる力の活用』が11記述数であった．その他に『清潔を保つ』，『活動能力の維持』の4つで構成された．『食事を摂る』の記述内容は，「生きがいにつながる食事は活動意欲を高め，意欲的な生活を送るためにも大切」や「食べることを純粋に楽しんでもらうことで，生きがいとなる」など，生きがいにつながる記述が多かった．『もてる力の活用』の記述内容は，「多少のリスクを負ってでも自分のできることを活かすことで，生き生きと暮らすことができる」の記述が多くを占めた．その他，喜び，自信，尊厳という内容が記述されていた．『清潔を保つ』では，「心理的にも社交的となり，他者との関わりにより生きがいにもつながる」や「自分らしさにつながる」などが記述されていた．『活動能力の維持』では，「身体機能を維持すること」などが記述されていた．

［精神的側面］は，10記述数であった．サブカテゴリにおいては，『生きがいや楽しみを見出す』，『レクリエーションへの参加』，『笑顔の表出』の3つで構成された．『生きがいや楽しみを見出す』では，「生きがいや希望があることで生活が充実し，意欲向上につながる」や「生きがいや楽しみがなければ，

リハビリの意欲も低下し，施設での生活が苦痛となる」など意欲という内容が記述されていた．『レクリエーションへの参加』では，楽しみという内容が記述されていた．『笑顔の表出』では，笑顔が大切であるという内容が記述されていた．

［社会的側面］は，11 記述数であった．サブカテゴリにおいては，『他者との交流』，『役割がある』の２つで構成された．『他者との交流』では，「他者との交流は，利用者同士の交流にもつながり生きがいを感じることができる」などが記述されていた．『役割がある』では，「役割は，生きる意味となっている」や「周囲とのかかわり」などが記述されていた．そして，これらは，生きがいや自信につながると記述していた．

２．高齢者の QOL を支える看護

学生が捉える高齢者の QOL を支える看護とは，表２に示すように，［生活を支える看護］，［尊厳を守る看護］，［専門的な知識と技術に基づいた看護］の３つのカテゴリで構成された．［生活を支える看護］は，33 記述数で多くを占めた．サブカテゴリにおいては，『コミュニケーション』が 12 記述数と一番多かった．その他，『自立支援』，『個別性を踏まえた援助』，『環境調整』，『元の生活へ近づけるケア』の５つで構成された．『コミュニケーション』では，「スタッフが積極的にコミュニケーションをとることが QOL を維持・向上していく上で大切」や「利用者の願望に気づくために普段からコミュニケーションを行い，利用者の意見を聴く」，「より多く

表１　看護大学生が捉える高齢者のQOLを高める要因

カテゴリ	サブカテゴリ	主な記述内容	サブカテゴリ記述数	カテゴリ記述数
身体的側面	食事を摂る	・生きがいにつながる食事は活動意欲を高め，意欲的な生活を送るためにも大切． ・食べることを純粋に楽しんでもらうことで生きがいとなる． ・食事は精神的意義である満足感や充実感の獲得につながる． ・その人らしく食事を楽しむことで，生きがいにつながる．	14	32
	もてる力の活用	・多少のリスクを負ってでも自分のできることを活かすことで，生き生きと暮らせる． ・もてる力を活かすことは，今もっている力をそのまま維持すること． ・今自分ができること，今の自分のもてる力を活かせることはその人にとって喜びである． ・もてる力を活かすことは尊厳を守ること． ・もてる力を活用することで自信につながる．	11	
	清潔を保つ	・心理的にも社交的になり他者との関わりにより生きがいにもつながる． ・自分が自分で思ったように清潔を保つことにより自分らしさにつながる． ・入浴の中で生きがいを感じるということは，爽快感を得ること．	4	
	活動能力の維持	・身体機能を維持すること． ・施設内での活動時間を長く持つこと． ・QOLを支えるためには活動できる状態であることが必要不可欠．	3	
精神的側面	生きがいや楽しみを見出す	・生きがいや希望があることで生活が充実し，意欲向上につながる． ・生きがいがあることで生活の中に笑顔が見られるようになる． ・生きがいや楽しみがなければ，リハビリの意欲も低下し，施設での生活が苦痛となる．	4	10
	レクリエーションへの参加	・週2回程度行われるレクリエーションが楽しみだという声が多く聞かれた． ・レクリエーションを行うにあたり重要な事は参加者全員が楽しめることである．	4	
	笑顔の表出	・高齢者のQOLを向上させるためには，笑顔が大切である．	2	
社会的側面	他者との交流	・他者との交流は，利用者同士の交流にもつながり生きがいを感じることができる． ・会話をしないことは，孤立感から抑鬱状態や脳を使わないため認知症の進行が早まる． ・会話をしないと，口周囲の筋肉を使わないことから，咀嚼・嚥下機能が低下する．	7	11
	役割がある	・役割は生きる意味となっている． ・役割があることで，孤独感を感じることなく周囲とのかかわりを持つことができる．	4	

の方と関われるような工夫を行う」などが記述されていた.『自立支援』では,「利用者の行える事は極力行ってもらうことが大切，それが自立支援につながる」や「維持向上のためには個人のもてる力を最大限に生かすケアが必要」などが記述されていた.『個別性を踏まえた援助』では,「入浴方法や入浴補助具の選定，衣類の着脱方法や種類などを状態に合わせて考える」や「食事を楽しんでもらうために体位の工夫，形態に合わせた食事介助が必要」などが記述されていた.『環境調整』では,「その人らしく生活をしていける環境を作ることが大切」などが記述されていた.『元の生活へ近づけるケア』では,「以前の生活を意識した援助を実施することは利用者にとって生活を営む上で重要」などが記述されていた.

［尊厳を守る看護］は，17記述数であった.サブカテゴリにおいては,『意思の尊重』,『存在承認』,『行動抑制しない援助』の3つで構成された.『意思の尊重』では,「利用者の方が求めるケアを提供することが大切」や「対象の生活行動・性格を理解したうえで，要望や生活に近づけるようにする」などが記

表2　高齢者のQOLを支える看護

カテゴリ	サブカテゴリ	主な記述内容	サブカテゴリ記述数	カテゴリ記述数
生活を支える看護	コミュニケーション	・スタッフが積極的にコミュニケーションをとることがQOL維持・向上には大切. ・利用者の願望に気づく為に普段からコミュニケーションを行い，利用者の意見を聴く. ・より多くの方と関われるような工夫を行う. ・利用者の思う行動がとれるようコミュニケーションをしていくことが重要.	12	33
	自立支援	・利用者の行える事は極力行ってもらうことが大切，それが自立支援につながる. ・維持向上のためには個人のもてる力を最大限に活かすケアが必要.	7	
	個別性を踏まえた援助	・入浴方法や入浴補助具の選定，衣類の着脱方法や種類などを状態に合わせて考える. ・食事を楽しんでもらうために体位の工夫，形態に合わせた食事介助が必要. ・もてる力を引き出し，個別性を踏まえた援助を行うことでQOLの向上につながる. ・高齢者のQOLを支える看護とは，利用者のレベルに合わせた援助を行うこと.	6	
	環境調整	・その人らしく生活をしていける環境を作ることが大切. ・日常生活を自由に過ごせる環境を作ることで個人を尊重することができる. ・安全を整えた環境を考える.	5	
	元の生活へ近づけるケア	・以前の生活を意識した援助を実施することは利用者にとって生活を営む上で重要. ・その人のADLと生活習慣を理解し，可能な限り入居前の生活に近づける事が望ましい. ・もとの生活にできるだけ近づけていけるようなケアは生きがいにつながる.	3	
尊厳を守る看護	意思の尊重	・利用者の方が求めるケアを提供することが大切. ・対象の生活行動・性格を理解したうえで，要望や生活に近づけるようにする. ・「自分だったらこうしてもらいたい」の気持ちを考えた丁寧なケアが求められる.	7	17
	存在承認	・反応がない人でも声を掛けながら行うことで，食事の時間が生きがいになる. ・高齢者の尊厳を守るためには声のかけ方や対応の仕方が重要. ・対象が主体となって積極的になれるよう促すことが大切である.	6	
	行動抑制しない援助	・離床センサーをつけるのならば，行動欲求を満たせられるような援助が必要. ・抑制することにより，利用者の尊厳を損なってしまうという面もある.	4	
専門的な知識技術に基づいた看護	観察力	・疾患や症状の管理が必要. ・対象者の身体を知ることが重要である. ・生活を壊さないように，高齢者の状態を把握し見守っていく必要がある. ・安全・安楽な援助を実施するには全体を見渡す能力と事前の準備が重要.	9	17
	アセスメント力	・アセスメントは対象者の状態回復やQOLを支えるうえで重要. ・安全と自立の間でその人にとって何が適切なのか，どうすることでその人の生活が満たされるかを考える.	4	
	安全・安楽な援助	・食事を楽しくするために，誤嚥リスクを考えて食事介助を行うことが必要. ・安全・安楽を考えて食事介助をすることで食事が楽しくなる.	3	
	苦痛緩和	・生命を維持しながらも，苦痛を最小限にすることが重要.	1	

述されていた．『存在承認』では，「反応がない人でも声を掛けながら行うことで，食事の時間が生きがいになる」などが記述されていた．『行動抑制しない援助』では，「離床センサーをつけるのならば，行動欲求を満たせられるような援助が必要」などが記述されていた．

［専門的な知識と技術に基づいた看護］は，17 記述数であった．サブカテゴリにおいては，『観察力』，『アセスメント力』，『安全・安楽な援助』『苦痛緩和』の４つで構成された．『観察力』では，「疾患や症状の管理が必要」や「生活を壊さないように，高齢者の状態を把握し見守っていく必要がある」などが記述されていた．『アセスメント力』では，「アセスメントは対象者の状態回復や QOL を支えるうえで重要」などが記述されていた．『安全・安楽な援助』では，「食事を楽しくするために，誤嚥リスクを考えて食事介助を行うことが必要」など食事介助における記述であった．『苦痛緩和』の記述内容は，「生命を維持しながらも，苦痛を最小限にすることが重要」であった．

Ⅶ．考察

１．看護大学生が捉える高齢者の QOL を高める要因

高齢者にとって QOL は，老年期をいかに自立し，心理的，社会的にも充実した人生が送れるかである（大渕，2016）．本研究において，学生は，高齢者の QOL を［身体的側面］，［精神的側面］，［社会的側面］の３側面から捉えていた．［身体的側面］では，サブカテゴリとして，『食事を摂る』，『清潔を保つ』が抽出された．先行研究において，独居の後期高齢者の QOL を高める要因は，個人活動，食事をつくる，毎日風呂に入ること（森下・川崎・中尾他，2007）であった．また，要介護高齢者の QOL に関する研究では，食事，清潔場面において満足度および幸福度が高い（伊東・錦，2004）との報告がある．本研究において，学生が捉える QOL と高齢者自身が感じる満足度や幸福度との一致がみられたことから，先行研究を支持する結果が得られたものと考える．さらに，食事や清潔が満たされることで，生きがいや満足感，充実感，意欲の向上につながるとその意味を記述していた．流石らは，QOL とは高齢者自身の主観的評価結果としての生活満足度，および日々の生活場面における生きがい・喜び・張りをいう（流石・伊藤，2007）と定義している．そして，老人福祉法の改訂（1994）では，基本的理念として「老人は，多年にわたり，社会の進展に寄与してきたものとして，かつ，豊富な知識と経験を有する者として敬愛されるとともに，生きがいをもてる健全で安らかな生活を保障されるもの」としており，高齢者がその人らしく生きるためにも，個々の生きがいに働きかける関わりは，老年看護においてとても重要である．本研究において，学生は，生活に着目し，その中で高齢者の生きがいや喜びにつながる場面を捉え，それが QOL の要素であると考えることができていた．

また，『もてる力の活用』，『活動能力の維持』が抽出され，もてる力を活かし活動できることが高齢者の QOL を高める要因であると捉えていた．高齢者の QOL を考慮した看護とは，ケアを受けた高齢者自身が，自分なりの生活機能において自立ができていると満足できること（櫻井，2011）であり，『もてる力の活用』は，対象の自立を促すための重要な要素であると考える．老年看護援助論に

て，もてる力や自立に着目した援助の重要性を強調した講義を行ってきたことで，学生は，実習を通してもてる力の意味を理解していたと考える．

［精神的側面］では，『生きがいや楽しみを見出す』，『レクリエーションへの参加』，『笑顔の表出』のサブカテゴリ，［社会的側面］では，『他者との交流』，『役割がある』のサブカテゴリが抽出された．介護福祉施設で生活する高齢者のQOLにおいて，人との交流や創造の喜び，人の役に立つことへの喜び，知的好奇心を満たされる喜びが多く語られた（西川，2007）との報告があり，本研究において，学生が捉えた高齢者のQOLを高める要因と高齢者自身が感じる喜びとの一致がみられたことから，先行研究を支持する結果が得られたと考える．さらに学生は，これらは生活の充実や意欲の向上，生きがいにつながるとその意味を記述していた．生きがいとは，今ここで生きているという実感，生きていく動機（長谷川・藤原・星，2001），また，従来のQOLに，何か他人のため，あるいは社会のために役立っているという意識や達成感が加わったもの（柴田，1998）と定義されている．学生は，高齢者施設という閉鎖的な生活の場で，高齢者がレクリエーションや会話を通じ笑顔で他者と関わる姿や施設での役割がある高齢者の姿などから，その人の生きがいを感じとることができ，高齢者のQOLを高める要因として捉えていたと考える．

一方で，［精神的側面］および［社会的側面］については，［身体的側面］の記述数に比べ少なかった．レクリエーションからの気づきに関する先行研究では，身体面について記述していた学生9名に対し，精神・心理面については2名，社会面については1名が記述していたのみであった（中岡・上西，2005）と報告している．また，小平は，学生は身体的な問題にばかり着目してしまい，患者の心理的な側面がみえない，精神的な問題と身体的な問題を二次元論的な問題として捉えていることから，看護の対象者を総合的に捉えられるような環境の調整をも含め幅広い視点から指導していくことが重要である（小平，2002）と，学生が高齢者を全人的に捉えることの必要性を述べている．本研究においても，精神的，社会的側面の記述が少なかったことから，高齢者を全人的に捉えることの弱さが窺え，これらの先行研究を支持する結果となった．これは，学生は介護が必要な高齢者との関わりから，身体的側面に着目しがちであったことが推測される．老年看護において，対象である高齢者を身体的，心理・霊的，社会・文化的なホリスティックな存在として捉える（山田，2017）ことが求められる．また，高齢者のQOLの評価は，身体的状態，家庭・社会的状態の客観的QOLと高齢者の主観的満足度，生きがいなどの主観的QOLの両面にわたる把握が必要である（大渕，2016）とされている．今後は，高齢者とその家族の身体的・心理的・社会的な状況を理解し，対象のQOL向上を目指した看護が実践できる基礎的能力を養うことを目的としている老年看護学実習Ⅱにつなげられるよう，高齢者個々のQOLとは何かについて考えることができ，全人的に高齢者を捉える能力を養う教育方法の検討が必要である．

2．高齢者のQOLを支える看護

本研究において，学生は，高齢者のQOLを支える看護として，［生活を支える看護］，［尊厳を守る看護］，［専門的な知識と技術に基づいた看護］の3つを捉えていた．［生活

を支える看護］のカテゴリは33記述と一番多い記述数であった．サブカテゴリにおいては，『コミュニケーション』が12記述と一番多く，高齢者の願望や要望に気づくために，普段からコミュニケーションをとり，高齢者の意見を聴くことや他者と関われるような工夫がQOLを支える看護であると記述していた．高齢者は，加齢に伴う変化や疾患による身体機能の障害によりコミュニケーションに支障をきたしやすく，自分の感情などを相手に伝えることができなかったり，対人関係が狭小化しやすいことで，精神的ストレスや自尊心，認知機能の低下をきたす可能性がある（亀井，2016）．学生は，高齢者にとってのコミュニケーションの意義を理解し，高齢者に寄り添う看護，そして他者との会話の中で，楽しみを見つけられるような環境をつくる看護の重要性を認識していたと考える．また，本実習では，多くの高齢者とコミュニケーションをとり，生活史に関心をもち対象と関わることができることを実習目標に挙げている．学生は，対象の興味に触れながら会話を進めていくことで，高齢者の笑顔を引き出すことができていた．表情でQOLを評価する日本語版認知症ケアマッピングでは，笑顔はQOLが高い望ましい状態と評価しており，これを用いた先行研究では，会話時の笑顔が一番多く，会話と笑顔は関係性が強い（宮崎・賀・三浦，2012）と報告している．学生はコミュニケーションを通して高齢者の笑顔を引き出すことができており，この成功体験からコミュニケーションはQOLを支える看護であると捉えていたと推測する．さらに，『自立支援』，『個別性を踏まえた援助』，『環境調整』，『元の生活に近づけるケア』のサブカテゴリが抽出された．先行研究では，高齢者施設での老年看護学実習を終えた学生が考える高齢者の立場に立ったケアとして，自立を目指した関わり，環境の充実，これまでの生活を考慮した関わりや個別を活かした関わりなどその人らしさを理解すること（杉野・丹羽，2011）が挙げられていた．また，介護老人保健施設実習を終えた学生の学びの研究では，高齢者への個別的な看護実践（千葉他，2008）が挙げられており，本研究における高齢者のQOLを支える看護との一致がみられ，これらの先行研究を支持する結果となった．さらに，学生は，その人らしさや利用者のレベルに合わせるなど，個別性について多く記述しており，生活の場である高齢者施設で多くの高齢者と関わり，個別性のある看護の重要性を認識できたと推測する．

［尊厳を守る援助］のサブカテゴリとして，『意思の尊重』，『存在承認』，『行動抑制しない援助』が抽出された．先行研究では，高齢者施設での老年看護学実習を終えた学生が考える高齢者の立場に立ったケアとして，意思や価値観を尊重することや一人の人として接する，声かけや態度をきちんとする（杉野・丹羽，2011）などの記述が挙げられており，高齢者の尊厳を守る看護の重要性に関して，本研究結果との一致がみられた．学生は，反応のない人でも声かけを行うことで，食事の時間が生きがいになる，食事に集中できるように声かけを行うなど，対象の存在を承認した関わりの重要性を記述していた．岡本らは，認知症や寝たきりの高齢者の場合，コミュニケーション能力は低く見積もられやすい傾向にある（岡本・桑田・吉岡他，2015）と述べている．また，先行研究では，後期高齢者のQOLの向上が図れるよう支援するためには，自尊感情を保持できる人的環境を保

障することも求められる（西川，2007）と報告している．本研究においても，学生は，実際の看護場面を通じ，意思疎通困難な高齢者に対しても意思ある存在としての関わりがQOLを支えるために重要であると捉えていた．

［専門的な知識と技術に基づいた看護］のサブカテゴリでは，『観察力』，『アセスメント力』，『安全・安楽な援助』，『苦痛緩和』が抽出された．中でも，『観察力』については9記述と多くを占めた．特別養護老人ホームにおける看護師の役割は，疾病の予防と早期発見・早期対応や慢性的な疾患を抱える人への健康管理などが挙げられ，介護老人保健施設における看護師の役割は，高齢者の健康上のリスクを見極めながら，もっている力を引き出すことや高齢者のQOLを高める働きかけ（堀内，2016）などが挙げられている．このことからも，看護師は対象の健康状態や潜在的能力を把握するための観察力やアセスメント力が求められる．学生は，実習を通じ，高齢者施設での看護師の役割について理解し，看護者自身が知識や技術を習得することが必要であること，そして観察をもとにアセスメントし，安全安楽な援助につなげていくことが高齢者のQOLを支える看護であると学ぶことができていた．

一方で，高齢者のQOLを生きがいの視点から捉えさせた課題レポートであったが，高齢者のQOLを高める要因とそれを支える看護におけるカテゴリやサブカテゴリのつながりが薄い傾向にあった．A看護大学における老年看護学実習Ⅰは，多くの高齢者と関わり，高齢者理解につなげることを目的としており，援助の場面を単発的に見学もしくは実施する実習内容であった．そのため高齢者一人ひとりの個別性を捉えることが難しく，学生が捉えた高齢者のQOLを高める要因について，これを支えるために看護職としてどのような看護を行うべきかが具体的にイメージできなかったこと，そして高齢者の思いを理解し，対象が望む生活に共感できていないことが要因であると推測される．さまざまな健康レベルにある高齢者への支援のあり方として，対象のQOL向上を目指した対応が基本となっており，高齢者のQOLとは何かについて基本的な考え方を理解した上で，実践の場では，対象の個別性を踏まえたQOL向上への看護を，高齢者の思いに沿って創造していく視点が必要である（大渕，2016）．そのため，対象個々のQOLとは何かを探求し，QOLを支えるためにどのような看護が必要なのかを具体的にイメージし統合できる能力を養うための教育方法の検討が必要である．

Ⅷ．結論

1．看護大学生が捉える高齢者のQOLを高める要因は，身体的側面では，『食事を摂る』，『もてる力の活用』，『清潔を保つ』，『活動能力の維持』が，精神的側面では，『生きがいや楽しみを見出す』，『レクリエーションへの参加』，『笑顔の表出』が，そして社会的側面では，『他者との交流』，『役割がある』と捉えており，高齢者の生活に着目することができていた．しかし，身体的側面についての記述が多くを占めていたことから，高齢者を全人的に捉える教育方法の検討が示唆された．

2．高齢者のQOLを支える看護は，［生活を支える看護］，［尊厳を守る看護］，［専門的な知識と技術に基づいた看護］であると捉えていた．しかし，高齢者のQOLを高める要因とそれを支える看護のカテゴリのつ

ながりが薄かったことから，高齢者ひとり一人において，QOL を支えるためにどのような看護が必要なのかを具体的にイメージし統合させること，そして高齢者の思いに共感できる教育方法の検討が示唆された．

Ⅸ．本研究の限界と今後の課題

本研究は，分析対象が少なかったことで一般化するには限界があった．また，実習施設が，介護老人保健施設と特別養護老人ホームであり高齢者の自立度に差があったことや，実習施設により援助の見学や実践内容に違いがあったことは，学生が捉えた QOL を支える看護に少なからず影響を及ぼした可能性もあり，今後は，高齢者施設の種類によって高齢者の QOL の捉え方に相違がないかを検証していく必要がある．また，老年看護学実習Ⅰで捉えた高齢者の QOL を支える看護が，老年看護学実習Ⅱでの看護過程の展開で活かされているのかを検証し，老年看護学として一貫性のある教育となるよう実習内容の検討も行っていく必要がある．

謝辞

本研究の趣旨をご理解，ご協力いただきました A 大学看護学部学生の皆様に深く感謝いたします．

【文　献】

千葉真弓，原田美香，細田江美他（2008）．介護老人保健施設での老年看護実習における学生の学び．長野県看護大学紀要，10，21-32.

長谷川明弘，藤原佳典，星旦二（2001）．高齢者の「生きがい」とその関連要因についての文献的考察－生きがい・幸福感との関連を中心に－．総合研究，75，147-170.

堀内園子（2016）．ナーシング・グラフィカ老年看護学①高齢者の健康と障害，107-114，メディカ出版，大阪.

今井弥生，渡辺俊之，棚橋さつき（2012）．老年看護学実習におけるレクリエーション実技がもたらす高齢者への効用．高崎健康福祉大学紀要，11，239-248.

伊東明日香，錦祐二（2004）．要介護高齢者の QOL 指標に関する研究－日常生活の中にける快の情動について－．文京学院大学研究紀要，6（1），201-214.

釜屋洋子，佐藤光栄（2016）．高齢者看護学実習におけるレクリエーション演習の授業効果と課題　レクリエーションに関する実習後のアンケートの分析．東都医療大学紀要，6（1），35-40.

亀井智子（2016）．新体系看護学全書，老年看護学②　健康障害をもつ高齢者の看護．39-48，メジカルフレンド社，東京.

小平廣子（2002）．高齢者の QOL 向上を目指す老人看護学実習．看護展望 27（7），102-109.

公益社団法人日本 WHO 協会（2017-1-15）．世界保健統計 2016 年版，http : //www.japan-who.or.jp/event/2016/AUTO_UPDATE/1605-4.html

古谷野亘（2004）．社会老年学における QOL 研究の現状と課題．J. Natl. Inst. Public Health，53（3），204-208.

隈部直子，田中康代，梶原美和子（2012）．老年看護学実習Ⅱにおける学生の学び　実習後振り返るレポートの内容を分析して．中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌，7，81-84.

宮崎嵩文，賀馨，三浦研（2012）．認知症高齢者の表情と行為に関する研究　認知症グ

ループホームを対象として．生活科学研究誌，11，9-12.
森下路子，川崎涼子，中尾理恵子他（2007）．後期高齢者女性のQOLと住居歴・生活・健康状態との関連，長崎大学紀要，19（2），31-40.
森田恵子，永田美和子（2006）．学生が老年看護学実習場面を通してとらえた高齢者看護観．桐生短期大学紀要，17，25-30.
内閣府（2018-6-9）．平成29年版高齢社会白書（全体版），
http：//www 8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/gaiyou/s 1_1.html.
中岡亜希子，上西洋子（2005）．老人ホームでのレクリエーションを通じて看護学生が学んだ老年者に対する気づき．大阪市立大学看護雑誌，1，31-37.
西川央江（2007）．介護福祉施設における高齢者のQOLについて．介護福祉7（2），68-80.
岡本充子，桑田美代子，吉岡佐知子他（2015）．エンド・オブ・ライフを見据えた“高齢者看護のキホン”100　看護管理者と創る超高齢社会に求められる看護とは．76-77，株式会社日本看護協会出版会，東京.
大渕律子（2016）．ナーシング・グラフィカ老年看護学①高齢者の健康と障害，34-42，メディカ出版，大阪.
流石ゆりこ，伊藤康児（2007）．終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者のQOLとその関連要因．老年看護学，12（1），87-93.
櫻井美代子（2011）．老年看護学の理念．看護と情報，18，15-20.
柴田博（1998）．サクセスフル・エイジング老化を理解するために．ワールドプランニング，東京，42-52.
杉野朋子，丹羽さよ子（2011）．「老年看護学実習」における学びの分析－学生の実習レポートかの分析より－．鹿児島大学医学部保健学科紀要，21，13-19.
山田律子（2017）．生活機能からみた老年看護過程　病態・生活機能関連図　第3版．vi-ix，医学書院，東京.
山本純子，小林菜穂子，三井京香他（2012）．老年看護学実習のレクリエーション体験における看護学生のQOLの学習効果　レポート内容分析より．大成学院大学紀要，14，161-168.